

# 前谷遺跡Ⅸ

埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

埼玉県戸田市教育委員会



## はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口14万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の急激な変化とともに社会的、文化的な環境も急速に変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護及び活用が求められています。

今回報告いたします前谷遺跡第9次発掘調査は、集合住宅建設に伴い、令和3年に緊急発掘調査が行われたものです。

この発掘調査により、弥生時代から奈良・平安時代にかけての生活の痕跡を多数検出し、戸田市内の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を得ることができ、地域の遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和3年8月

戸田市教育委員会  
教育長 戸ヶ崎 勤



## 例 言

1. 本書は埼玉県戸田市上戸田二丁目27番6他に所在する前谷遺跡第9次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人事業者による集合住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会（担当者：今井源吾）が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。また、整理作業及び報告書作成作業は、戸田市教育委員会が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は、令和3年1月13日から令和3年2月12日まで行い、整理作業・報告書作成作業は令和3年2月15日から令和3年8月31日まで株式会社東京航業研究所で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの事業費は、全て事業者の負担による。
5. 本書は埼玉県戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、今井源吾が監修した。編集は小森暁生（株式会社東京航業研究所）が行った。執筆は第1章第2節、第2章第4節、第3章は内田健太が、その他の部分は今井源吾が行った。
7. 発掘現場での記録写真と出土遺物の撮影は株式会社東京航業研究所が行った。
8. 本書の著作権は、市教委が保有する。発掘調査成果の周知、活用、学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製し、利用できるものとする。
9. 出土遺物及び発掘調査の各種データ等は全て市教委が保管し、活用を図るものとする。
10. 本事業は以下の組織により実施した。

### 【埼玉県戸田市教育委員会】

教 育 長 戸ヶ崎 勤

教 育 部 長 山上 睦只

次 長 星野 正義

生涯学習課長 福田 忠史（令和3年1月17日まで）

関根 晃（令和3年3月31日まで）

鎌田 陽子（令和3年4月1日から）

高屋 勝利（令和3年4月1日から）

生涯学習課主幹 細井 薫子（令和3年3月31日まで）

本橋 洋（令和3年4月1日から）

生涯学習課主任 吉田 幸一（令和3年3月31日まで）

生涯学習課主事 金子 遥奈（令和3年4月1日から）

今井 源吾（出土品整理・報告書作成担当）

### 【株式会社東京航業研究所】

調査員 内田 健太

発掘調査参加者及び整理作業参加者

岩本多恵子 上原 壽 榎本昇 大久保 聡 大熊 福太郎 小野寺 信 兼目 恵美

島崎 美代子 鈴木 晃 鈴木 智之 高田 拓郎 田上 達恵 田口 陽祐 竹内 あい

為石 篤 中原 はつね 中山 幸恵 奈治原 亮年 西村 由美子 萩嶋 里江 林 洋子

古間 果那子 村上 京子 森田 望 柳澤 美樹 山羽 孝（敬称略・五十音順）

11. 本書の作成にあたり、次の方々・機関に御指導、御助言、御協力を賜った。

野口節子 大東建託株式会社



## 凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構トレース図等の方位は、図中に座標北の方位を示した。
2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系 2011 に則している。
3. 遺構番号は調査の進捗過程で、遺構のプランが確認された順に種別ごとに付したが、必要に応じて整理・報告書作成作業の過程で遺構の種別、番号を変更している。遺構略号は以下の通りである。  
SD：溝状遺構 SK：土坑 P：ピット
4. 発掘調査時の土層観察における色調や遺物観察における色調は、『新版 標準土色帳（小山正忠・竹原秀雄 編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行）』を参考にした。
5. 遺物拓影図は、向かって右側に内面、左側に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左側に外面を示した。また、底面は下位に、天井面は上位に示した。
6. 遺物の種別の内、古墳時代前期初頭から平安時代に属する土器は、全て「土師器」と表記した。
7. 遺物実測図の内、須恵器は断面を黒塗りにし、その他の土器については断面を白抜きにした。また、赤彩部はトーンにより示した。
8. 遺物観察表法量の [ ] の値は残存部からの推定値を示す。
9. 遺物実測図および遺構実測図、写真図版の縮尺は、全て挿図中に示した。
10. 標高は、T.P.（東京湾中等潮位）を基準とした。
11. 遺構実測図の水系レベルは全て標高 3.30 m に統一した。
12. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例：MY. 9. SD 01 - 25  
遺跡略号 調査次 遺構種別 遺構番号 遺物番号

表面採集遺物や遺構外出土遺物は、遺跡略号及び調査次のみを記載した。

# 目次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の方法と経過	2
第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 遺跡・調査の概要	8
第4節 基本層序	10
第3章 検出された遺構と遺物	12
第1節 弥生時代の遺構と遺物	12
1 周溝状遺構	12
2 ビット	13
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物	17
1 溝状遺構	17
2 土坑	22
第3節 時期不明の遺構と遺物	27
1 溝状遺構	27
2 土坑	29
3 ビット	30
4 遺構外出土遺物	31
第4章 まとめ	32
1 弥生時代後期	32
2 奈良・平安時代	32
3 結語	33

参考文献

写真図版

報告書抄録／奥付



## 挿図目次

第 1 図	埼玉県の地形	3	第 15 図	第 5 号溝状遺構実測図 (SD05)	21
第 2 図	戸田市域の地形	5			
第 3 図	前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図	6	第 16 図	第 3 号土坑実測図 (SK03)	22
第 4 図	前谷遺跡調査区位置図	7	第 17 図	第 3 号土坑出土遺物実測図	22
第 5 図	基本層序	10	第 18 図	第 4 号土坑実測図 (SK04)	23
第 6 図	全体図	11	第 19 図	第 4 号土坑出土遺物実測図	23
第 7 図	第 1 号周溝状遺構 (SD04)・第 5 号 ピット (P05) 実測図 (1)	13	第 20 図	第 5 号土坑実測図 (SK05)	24
第 8 図	第 1 号周溝状遺構 (SD04)・第 5 号 ピット (P05) 実測図 (2)	14	第 21 図	第 5 号土坑出土遺物実測図	24
第 9 図	第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 (1)	14	第 22 図	第 6 号土坑実測図 (SK06)	25
第 10 図	第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 (2)	15	第 23 図	第 6 号土坑出土遺物実測図	25
第 11 図	第 1 号溝状遺構実測図 (SD01)	17	第 24 図	第 9 号土坑実測図 (SK09)	26
第 12 図	第 1 号溝状遺構出土遺物実測図	18	第 25 図	第 11 号土坑実測図 (SK11)	26
第 13 図	第 2 号溝状遺構実測図 (SD02)	20	第 26 図	第 3 号溝状遺構実測図 (SD03)	27
第 14 図	第 2 号溝状遺構出土遺物実測図	20	第 27 図	第 6・7・8・9・10 号溝状遺構 実測図 (SD06・07・08・09・10)	28
			第 28 図	第 1・2・7・8・10 号土坑実測図 (SK01・02・07・08・10)	29
			第 29 図	第 1・2・3・4 号ピット実測図 (P01・02・03・04)	30
			第 30 図	遺構外出土遺物実測図	31

## 挿表目次

第 1 表	前谷遺跡周辺遺跡の概要	6	第 5 表	第 3 号土坑出土遺物観察表	22
第 2 表	第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表	16	第 6 表	第 4 号土坑出土遺物観察表	23
第 3 表	第 1 号溝状遺構出土遺物観察表	19	第 7 表	第 5 号土坑出土遺物観察表	24
第 4 表	第 2 号溝状遺構出土遺物観察表	21	第 8 表	第 6 号土坑出土遺物観察表	25
			第 9 表	遺構外出土遺物観察表	31

## 図版目次

### 図版 1

- 1 調査区全体（上空から）

### 図版 2

- 1 第1号周溝状遺構遺物出土状況（東から）
- 2 第1号周溝状遺構遺物出土状況（北から）- 1

### 図版 3

- 1 第1号周溝状遺構遺物出土状況（北から）- 2
- 2 A区完掘状況（西から）- 1
- 3 A区完掘状況（西から）- 2
- 4 B区完掘状況（西から）
- 5 B区完掘状況（北から）

### 図版 4

- 1 B区基本層序（北から）
- 2 B区壁断面（北から）
- 3 第1号周溝状遺構壁断面（北から）
- 4 第1号周溝状遺構B断面（北から）
- 5 第1号周溝状遺構C断面（南から）
- 6 第5号ピット完掘状況（南から）
- 7 第1号溝状遺構完掘状況（西から）
- 8 第1号溝状遺構断面（東から）

### 図版 5

- 1 第2号溝状遺構完掘状況（西から）
- 2 第2号溝状遺構断面（東から）
- 3 第5号溝状遺構断面（北から）
- 4 第3号土坑断面（西から）
- 5 第4号土坑完掘状況（南から）
- 6 第5号土坑完掘状況（東から）
- 7 第6号土坑断面（北から）
- 8 第9号土坑完掘状況（東から）

### 図版 6

- 1 第11号土坑完掘状況（東から）
- 2 第3号溝状遺構完掘状況（西から）
- 3 第3号溝状遺構断面（東から）
- 4 第6号溝状遺構断面（南から）
- 5 第8号溝状遺構断面（東から）
- 6 第9号溝状遺構断面（東から）
- 7 第10号溝状遺構完掘（北から）
- 8 第1号土坑完掘状況（東から）

### 図版 7

- 1 第1号土坑断面（東から）
- 2 第2号土坑完掘状況（西から）
- 3 第2号土坑断面（東から）
- 4 第7号土坑完掘状況（東から）
- 5 第7号土坑断面（東から）
- 6 第8号土坑完掘状況（東から）
- 7 第8号土坑断面（北から）
- 8 第10号土坑完掘状況（北から）

### 図版 8

- 1 第1号ピット完掘状況（北から）
- 2 第1号ピット断面（北から）
- 3 第2号ピット完掘状況（北から）
- 4 第2号ピット断面（北から）
- 5 第3号ピット完掘状況（西から）
- 6 第3号ピット断面（南から）
- 7 第4号ピット完掘状況（東から）
- 8 第4号ピット断面（東から）

### 図版 9

出土遺物（1）

### 図版 10

出土遺物（2）

### 図版 11

出土遺物（3）

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

令和2年1月、事業者から戸田市教育委員会（以下、「市教育委員会」という。）に対し、戸田市上戸田二丁目27番6他における集合住宅建設事業計画及び埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するように指導した。

これを受け、令和2年2月12日に事業者から市教育委員会に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が令和2年11月24日に実施し、弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代の溝状遺構、土坑、ピットとこれに伴う同時期の土師器・須恵器を確認した。

その後、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、柱状改良等で埋蔵文化財の破壊を免れない建物建設予定地については記録保存のための緊急発掘調査、それ以外については現状保存を実施することで合意した。

令和2年2月12日、事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、令和2年12月18日付戸教生第1558号にて県教育委員会教育長あてに達達した。

これを受けて、県教育委員会から事業者に対し、令和3年1月12日付教生文第4-1546号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

また、事業者は市教育委員会に対し、令和2年12月21日付で発掘調査の依頼書を提出し、また令和2年12月21日付戸教生第1584号にて2者による「集合住宅建設予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、市教育委員会から県教育委員会宛に、文化財保護法第99条の規定に基づき、令和3年1月7日付戸教生第1633号により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、前谷遺跡第9次発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 発掘調査と整理作業の方法と経過

### 1 発掘調査

前谷遺跡第9次調査は令和3年1月13日から令和3年2月12日まで実施した。調査面積は111.79㎡である。1月13日に調査区を設定し、重機による表土掘削を開始した。

調査区はA区とB区に分割し、掘削で生じた排土は調査区の未掘削範囲に仮置きして整形し、防塵ネットをかけて保管した。1月27・28日に重機による調査区反転作業を行った。

写真は覆土堆積状況、遺物出土状況、完掘状況などを適宜撮影した。遺構完掘後、ドローンによる空撮で景観写真撮影と遺構計測写真の撮影を行った。

2月12日に調査区全体の埋め戻しを行い、テントの撤去と機材を撤収し、全ての調査を完了した。

### 2 整理作業

当該調査に係る出土品及び図面・写真・デジタルデータの整理作業・報告書作成は、令和3年2月15日から令和3年8月31日まで、株式会社東京航業研究所で実施した。

発掘調査で出土した出土品は、洗浄・注記・接合を実施した。その後、報告書掲載の遺物を抽出し、台帳を作成してから実測図作成・拓影採取・データをデジタル化し、デジタルトレースと編集作業を実施した。遺構の平面図・断面図・写真測量データも一部デジタル化し、コンピューターにより編集作業を実施した。

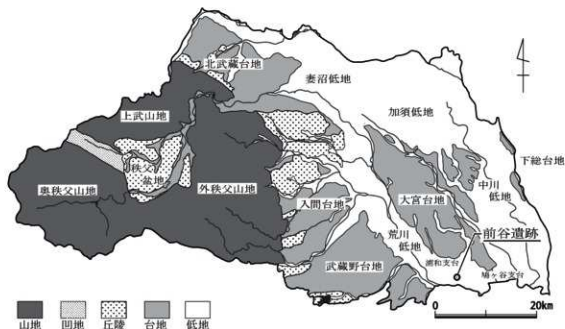
## 第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

### 第1節 地理的環境

戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.19km<sup>2</sup>の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市及び川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市及び和光市、南の東京都板橋区及び北区とは、荒川を隔てて接している。市域には、国道17号線（旧中山道）や新大宮バイパスが南北に走り、首都高速5号線、東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり、急激な市街地化が進んでいる。都心に近い立地のため、工場や流通センターが数多く所在する。

戸田市の地形は、約2万年前の最終氷期に形成された開析谷を、利根川等の河川が運搬した土砂で充填してきた平坦な沖積低地（荒川低地）に位置している。荒川低地の下流には標高3mほどの微高地が発達し、市内では中央部を西は美女木から上戸田を通り、東は川口市まで荒川にそって分布し、この微高地の南北に低地が裾のように広がる。この微高地は自然堤防とする説もあるが、荒川右岸に微高地が確認できないことや、形状が団子状を呈していることから浅谷もしくは海成段丘との指摘もある。

市内の地層は、戸田市本町付近では地下50mの地点に開析谷の基底礫層があり、谷を軟弱な沖積層が充填している。沖積層の上部2mから3mの層は戸田・蕨地域ではよく見ることができる黄褐色・灰白色のシルト質粘土層で、戸田市においては遺跡の検出面としている層である。この層は岩質が均一である点や、微低地にはヨシ・マコモなどの水辺植物の遺体からなる泥炭層が挟在していることから、荒川低地を流れていた旧利根川が中川低地に東遷し、デルタ的環境から流水の影響の少ない湖沼・



第1図 埼玉県の地形

潟的な環境に移行した後に形成された層である。形成時期については、泥炭層の炭素年代が 1640 ± 60yBP とされることから、弥生時代末から古墳時代前期の時期にあたり、市内に初めて集落が形成された当時は微高地の周囲には湖沼・潟的な環境が広がっていたと見られる。

## 第2節 歴史的環境

戸田市では、現在までのところ旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代に帰属する遺跡も確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が検出されている。前期では、堤外から前期後葉諸磯 a 式の破片資料 1 点が出土しており、本町からは前期末のほぼ完形の十三菩提式深鉢形土器が出土している。また、戸田市文化会館の建設中に、含礫砂層から縄文時代前期から中期の頃の化石人骨が見つかった。人骨の周囲には丸木舟と見られる木屑なども見つかり、この時期の戸田市域が海進の影響を受けていたことが分かる。中期は、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡や南原遺跡などで勝坂式・阿玉台式や加曾利 E 式期の土器片が検出されている。後期は、鍛冶谷・新田口遺跡では、堀之内式、加曾利 B 式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器片が出土している。

縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭になると、市内の微高地上に遺跡が形成されるようになる。

弥生時代後期末から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡及び根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和 51 年 (1976) に埼玉県選定重要遺跡に選定された鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓 (周溝状遺構) 群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、第 2 次及び第 3 次調査では、環濠と思われる溝状遺構と溝の東部に密集する竪穴建物跡群を検出していることから、上戸田本村遺跡周辺が当該期の環濠集落であった可能性が高い。中期の遺構・遺物が検出された遺跡は南原遺跡第 2 次調査 B 区で竪穴建物跡 3 軒、第 9 次調査で井戸跡 1 基、第 10 次調査で竪穴建物跡 1 軒と、土坑 2 基が確認されたのみである。

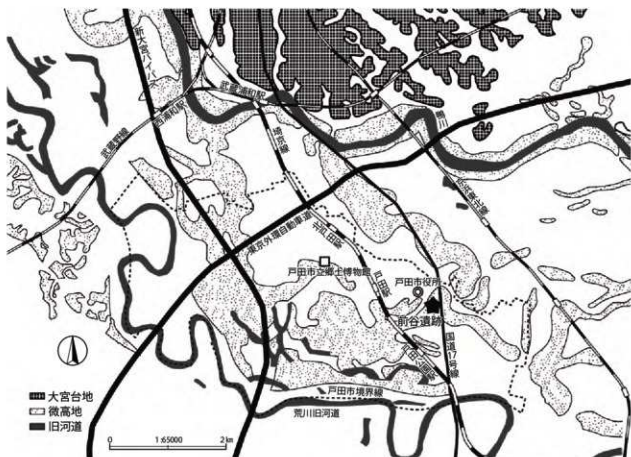
古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内には、「くまん塚」と呼ばれた円墳が所在し、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀 2 振が出土している。また、上戸田本村遺跡では鬼高期の竪穴建物跡 2 軒、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が 1 基検出されている。南原遺跡では、第 1 次調査で人物埴輪、円筒埴輪等が出土した円墳 1 基、第 2 次調査 A 区で円形周溝墓 (円墳) 1 基、第 3 次調査 D 区で鬼高式期の竪穴建物跡 1 軒と屋外竈 1 基、第 4 次調査で円形周溝墓 (円墳) 2 基、6 次調査で円形周溝墓 (円墳) 1 基、第 8・9 次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が 2 基検出されている。第 12 次調査では、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が 1 基検出されている。

平安時代は、南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、柵列跡、畝状遺構が検出されている。

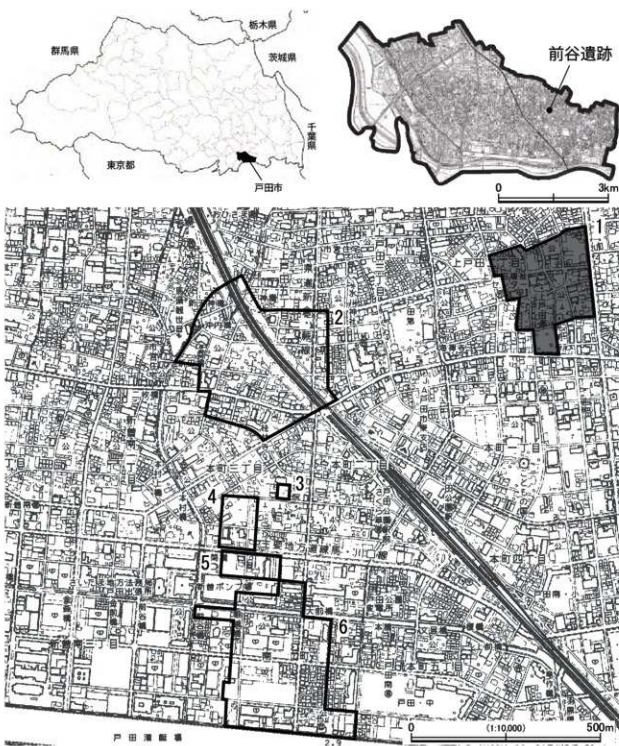
中世は、市の西部からさいたま市の南西部がかつて佐々木郷に当たり、鎌倉時代から戦国時代に

けて鶴岡八幡宮の社領であった。当該期は、大前遺跡や前谷遺跡、南原遺跡、南町遺跡及び美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡などが検出されている。

近世は、市の大半の村が幕府の直轄領となり、徳川家の鷹場として使用されていたことが分かっている。また、五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡る「戸田の渡し」が板橋宿と蔵宿を結ぶ交通の要所として機能していた。当該期は鍛冶谷・新田口遺跡第9次調査で溝状遺構や井戸跡が、美女木八幡社脇遺跡では美女木八幡社を廻っていた堀の跡が検出されている。



第2図 戸田市域の地形



第3図 前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図

第1表 前谷遺跡周辺遺跡の概要

NO.	遺跡名	所在地	種別	土器時代	立地
1	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城跡跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	段高地
2	観音谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新倉	集落跡	弥生後期・古墳前期	段高地
3	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	段高地
4	上戸田本町遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳後期	段高地
5	高町遺跡	戸田市高町	集落跡	古墳前期	段高地
6	高取遺跡	戸田市高町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	段高地





- |      |                  |                                 |
|------|------------------|---------------------------------|
| I    | 第1次調査(1972)      | : 戸田市教育委員会調査 (伊東 1978)          |
| II   | 第2次調査(2007)      | : 戸田市教育委員会調査 (岩井 2014)          |
| III  | 第3次調査(2011)      | : 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査 (赤熊 2015) |
| IV   | 第4次調査(2011~2012) | : 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査 (岩井 2015) |
| V    | 第5次調査(2016)      | : 戸田市教育委員会調査 (長澤 2018)          |
| VI   | 第6次調査(2017)      | : 戸田市教育委員会調査 (吉田 2019)          |
| VII  | 第7次調査(2019)      | : 戸田市教育委員会調査 (今井・辻 2020)        |
| VIII | 第8次調査(2020)      | : 戸田市教育委員会調査 (今井・諸星 2020)       |
| IX   | 第9次調査(2021)      | : 戸田市教育委員会調査 (本調査)              |
| X    | 第10次調査(2021)     | : 戸田市教育委員会調査 (今井・黒済・林)          |

第4図 前谷遺跡調査区位置図

### 第3節 遺跡・調査の概要

前谷遺跡は、JR 埼京線戸田公園駅から北東約 700m の埼玉県戸田市上戸田二丁目目内に所在する。遺跡周辺には、「橋構」、「竹ノ内」、「左衛門屋敷」、「雑色」、「元蔵」等の地名が古くから残っている。

中山道蔵宿の成立が元蔵からの移住に伴うことが、戸田・蔵の近世文書で確認でき、中世には同地に六斎市などが開かれていたと見られ、また土塁の一部であった可能性のある地彫れ状の地形が残存していたことから、「蔵城」がこの地域に存在していた可能性が指摘されている。

本遺跡は、昭和 47 年（1972）の第 1 次発掘調査から、本調査を含めて 10 回にわたる発掘調査が実施されている。

第 1 次発掘調査は、昭和 47 年 8 月 23 日から 9 月 6 日までの期間で、店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基と平安時代から中世の溝状遺構 8 条などである。遺物は、周溝状遺構から複合口縁を持つ壺形土器、台付甕形土器、広口壺形土器、高環形土器などが出土している。第 3 溝から 10 世紀代に比定できる灰釉陶器、須恵器、土師器等が検出され、第 4 溝は、断面形状が葉研状を呈しており、中世城館の堀であった可能性が指摘されている。

第 2 次発掘調査は、平成 19 年（2007）2 月 13 日から 3 月 20 日までの期間で、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟、溝状遺構 3 条、中世の溝状遺構 2 条、井戸跡 2 基、土坑 1 基、その他時期不明であるが平安時代から中世に帰属する可能性がある槽列跡 4 列、土坑 4 基、ピット 43 基である。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の瓦塔片、土師器、須恵器、中世の陶器、漆器、板碑、その他土製紡錘車、砥石等である。これらのなかでも詳細な時期・産地は不明であるが、第 5 号溝状遺構から出土した線刻画が施された須恵器瓶の破片資料は、他に類例が少なく、特筆できる。

第 3 次発掘調査は、平成 23 年（2011）12 月 1 日から平成 24 年（2012）1 月 31 日までの期間で、戸建分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は古墳時代前期の周溝状遺構 6 基、井戸跡 1 基、土坑 10 基、平安時代の土坑 37 基、井戸跡 3 基、溝状遺構 1 条、ピット 59 基、中・近世の溝状遺構 4 基、井戸跡 1 基などである。遺物は、複合口縁を持つ壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、無頸壺、8・9 世紀の東金子、南比企及び末野産の須恵器、中世の常滑焼、近世の天目茶碗等が出土している。

第 4 次発掘調査は、平成 23 年 12 月 26 日から平成 24 年 1 月 18 日までの期間で戸建専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 1 基、溝状遺構 1 条、平安時代の溝状遺構 3 条を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦塔片、中世の陶器等を検出した。

第 5 次発掘調査は、平成 28 年（2016）6 月 1 日から 6 月 30 日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代

前期初頭の周溝状遺構4基、溝状遺構1条、平安時代の溝状遺構1条、土坑2基、井戸跡2基、その他時期不明のピット11基を検出した。遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中世の陶器片を検出した。

第6次発掘調査は、平成29年(2017)4月17日から5月31日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構4基、土坑1基、平安時代から中世相当の溝状遺構5条、土坑21基、井戸跡4基を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中近世の陶器片が出土した。

第7次発掘調査は、令和元年(2019)12月2日から12月20日までの期間で戸建専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、平安時代から中世までの畝状遺構17条、区画溝3条、土坑26基、その他時期不明のピット23基を検出した。出土遺物は、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器が出土した。このうち畝状遺構は平安時代の畑作遺構として戸田市内では初めて確認された。

第8次発掘調査は、令和2年(2020)5月8日から6月1日までの期間で共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、平安時代の柵列跡1基、溝状遺構1基、井戸跡1基、土坑2基、ピット4基、中世の溝1条、土坑4基、近世の土坑6基、ピット12、時期不明の性格不明遺構1条、ピット42基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器、砥石が出土した。

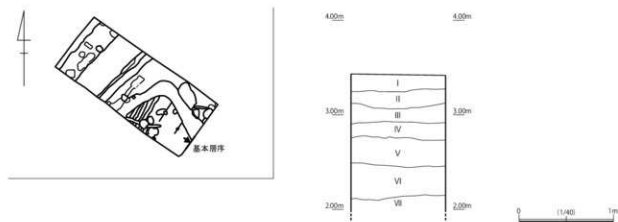
第10次発掘調査は、令和3年(2021)1月12日から2月12日までの期間で店舗・共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構の可能性のある溝状遺構8基、土坑7基、平安時代から中世までの溝状遺構6条、井戸跡1基、土坑12基、近世の井戸跡1基、土坑9基である。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、石帯、陶磁器、近世土器、銭貨が出土した。

本調査は、第9次発掘調査となる。令和3年(2021)1月13日から2月12日までの期間で集合住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代の周溝状遺構1基、ピット1基、奈良・平安時代の溝状遺構3条、土坑6基、時期不明の溝状遺構6条、土坑5基、ピット4基である。遺物は、弥生時代の土器、奈良・平安時代の須恵器・土師器、土師質土器、陶器が出土している。

## 第4節 基本層序

遺跡の基本層序は、SD04の掘り込みを利用し調査区南東壁面にテストピットを設定し確認を行った。詳細は以下の通りである。

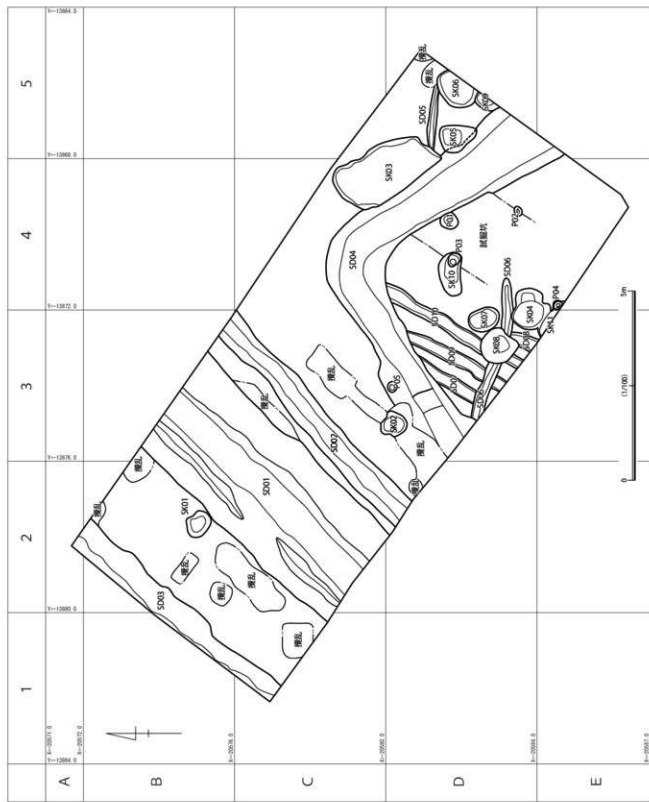
- I層は表土、もしくは攪乱層で、地点により構成内容が異なるが現代の所産である。  
 II層はにぶい黄褐色(10YR5/4)のシルト質土で、黒色土がクラック状に入る。遺構検出面。  
 III層は褐色(7.5YR4/6)のシルト質土で、II層と同様の黒色土を少量含む。  
 IV層は黄褐色(10YR5/6)のシルト質土で、II層と同様の黒色土を少量含む。  
 V層は褐色(10YR4/4)のシルト質土で、黒色土を少量含む。  
 VI層はにぶい黄褐色(10YR4/3)で、グライ化した青灰色土がまだら状に入る。  
 VII層は黄褐色(10YR5/8)で、VI層と同様のグライ化した青灰色土が多量にまだら状に入る。



### 基本層序

- |                      |   |
|----------------------|---|
| I層 表土 攪乱             |   |
| II層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) | 粘性あり、しまりややあり。黒色土(φ10~30mm)をクラック状に中量含む。                  |
| III層 褐色土(7.5YR4/6)   | 粘性あり、しまりあり。黒色土(φ10~30mm)をクラック状に少量含む。                    |
| IV層 黄褐色土(10YR5/6)    | 粘性あり、しまりあり。黒色土(φ10~50mm)をクラック状に少量含む。                    |
| V層 褐色土(10YR4/4)      | 粘性あり、しまりややあり。黒色土(φ10~20mm)を少量含む。                        |
| VI層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) | 粘性あり、しまりややなし。黒色土(φ1~5mm)を少量、青灰色土(φ10~30mm)を斑状に含む。シルト質土。 |
| VII層 黄褐色土(10YR5/8)   | 粘性あり、しまりなし。青灰色シルト(φ10~50mm)を斑状に多量、黒色土(φ1~3mm)を微量含む。     |

第5図 基本層序



第 6 图 全体图

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 弥生時代の遺構と遺物

#### 1 周溝状遺構

##### 第1号周溝状遺構—SD04

遺構（第7・8図・図版2-1・2・図版3-1・図版4-3・4・5）

位置：C-3・4、D-3・4・5、E-4・5グリッド。重複関係：SD06・07・09・10、SK03・05・09、P01に切られる。平面形・規模：調査区壁面南西側の中央から北東方面へ伸び（走行方位N-58°-E）C-4グリッド付近で南東へ屈曲し調査区外まで伸びる（走行方位N-39°-W）。総延長約11.6m、上端幅0.92～1.97m、下端幅0.52～1.31m、確認面からの深さは最大約0.99mである。方台部は6.04m以上×5.15m以上あり全体の1/3強を調査したものと思われる。北東コーナーを起点に考えると検出した溝の長さは北西溝を6.2m、南東溝6.3mである。溝幅にはやや広狭があり、北西溝では検出部の中央から西側で外側にやや広がっている。南東溝では北東コーナーから南側に向かい徐々に溝幅が広がって行く。底面は平坦で、北西溝は中央部付近から北東コーナーに向かい傾斜している。南東溝は検出された中央部分が一番低く、北西溝西側には約0.2m程の段差が認められる。断面は概ね外反しながら立ち上がる。北東コーナー付近の外壁は例外的に内湾しながら立ち上がる。北東コーナー付近の内壁と北西溝の外壁の一部が緩やかに立ち上がっている。

覆土はレンズ状の自然堆積を基本とする。方台部からの流れ込みと考えられる明らかな層は確認できなかった。

遺物（第9・10図・第2表・図版9・10-1）

出土状況：遺物は主に弥生時代後期の高杯・壺・甕などが出土しているが、いずれも覆土中から検出されており原位置を保ったものはない。比較的残存状態のいい高杯が、溝跡の北東コーナー部付近の覆土下層で出土しており、中でも小形の高杯と脚台部の四ヶ所に三角形の透かしを持つ高杯はほぼ完形で出土している。遺物は覆土の中層から下層にかけて出土し、略完形で復元できるものが多い。出土器種は高杯・壺・鉢・台付甕である。高杯・壺・鉢は赤彩されるものが多い。正位で出土したものが少ないことから、多くは方台部から溝中に崩落したものと思われる。

1～5は壺でいずれも赤彩される。1は複合口縁を呈する。頸部に円形浮文を付し、以下に結節を伴う縄文帯、無文部を挟み下位に磨消縄文による連続山形文を描く。口縁部は羽状縄文帯と棒状浮文を付す。2は口縁部を欠くが器形から単純口縁で胴部上半に結節を伴う縄文帯を持つ。3は口縁部で1と同様に羽状縄文帯と棒状浮文を付す。4・5は胴部下半から底部である。6・7は高杯でいずれも赤彩される。6は長い脚部に三角形の透かし孔を等間隔に四か所穿つ。7は坏部が内湾するものである。8～10は鉢でいずれも赤彩される。8は肥厚した口縁部に二個一對の焼成前穿孔が二か所認められる。9・10は頸部に稜を持ち口縁部が短く外屈する。11は甕、12は台付甕である。摩滅により調整が見づらい。

#### 時期

遺構の形状や出土遺物から、弥生時代後期後半の周溝状遺構と考えられる。

## 2 ビット

### 第5号ビット P05

遺構 (第7・8図・図版4-6)

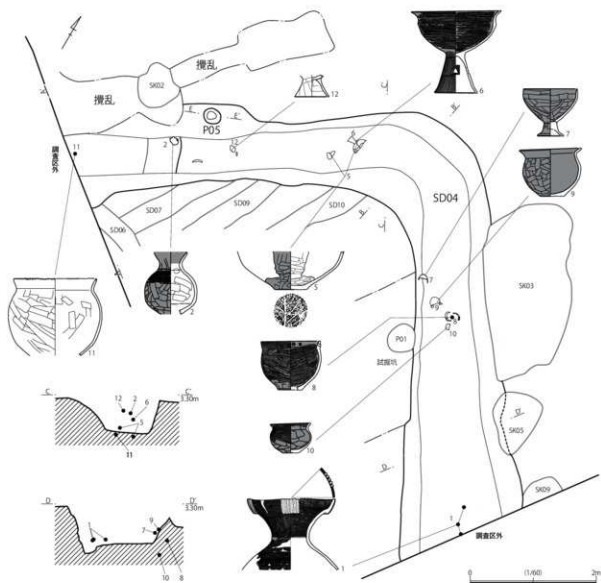
位置: D-3グリッド。重複関係: SD04と同時期。平面形・規模: 調査区中央より南東寄りで検出された。主軸方向N-86°-W。長軸0.29m、短軸0.24m、検出面より深さ0.35mで、平面形は不整形円形を呈する。

遺物

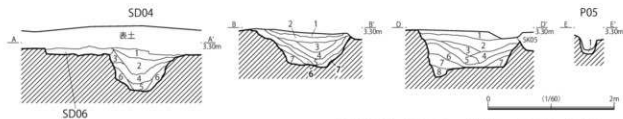
出土状況: 出土遺物なし。

時期

検出位置や覆土のありかたから、SD04に付随するため、弥生時代後期と思われる。



第7図 第1号周溝状遺構 (SD04)・第5号ビット (P05) 実測図 (1)



第1号周溝状遺構A-A'

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱い、しまりあり。地山粒子・ブロック (φ1~40mm) を少し含む。  
 2層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性ややあり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を若干含む。  
 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。地山粒子・ブロック (φ1~30mm) を少し含む。  
 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性ややあり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を少し含む。  
 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。地山粒子・ブロック (φ1~20mm) を含む。黒色土・ブロック (φ5~20mm) を少し含む。  
 6層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまりあり。地山粒子・ブロック (φ1~50mm) を多く含む。

第1号周溝状遺構B-B'

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ5~30mm) を含む。  
 2層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性ややあり、しまりあり。地山粒子・ブロック (φ2~10mm) を少し含む。  
 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を少し含む。  
 4層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性ややあり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を含む。  
 5層 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を若干含む。

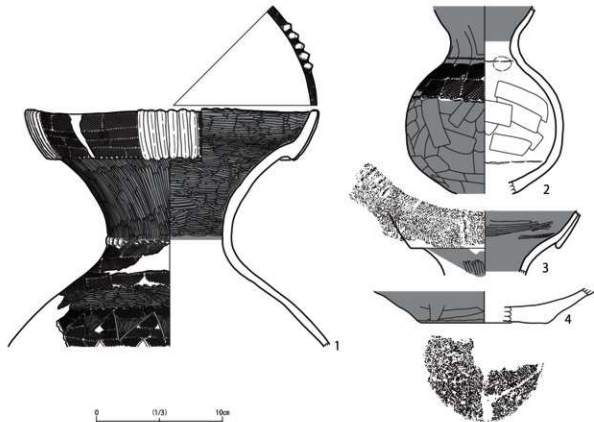
第1号周溝状遺構D-D'

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ5~40mm) を含む。  
 2層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性ややあり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を少し含む。  
 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ10~40mm) を含む。  
 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を少し含む。  
 5層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ10~30mm) を含む。  
 6層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ10~40mm) を多く含む。  
 7層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘性強い、しまりあり。地山ブロック (φ10~50mm) を非常に多く含む。  
 8層 黄灰色土 (2.5Y5/1) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ10~50mm) を非常に多く含む。

第5号ピット

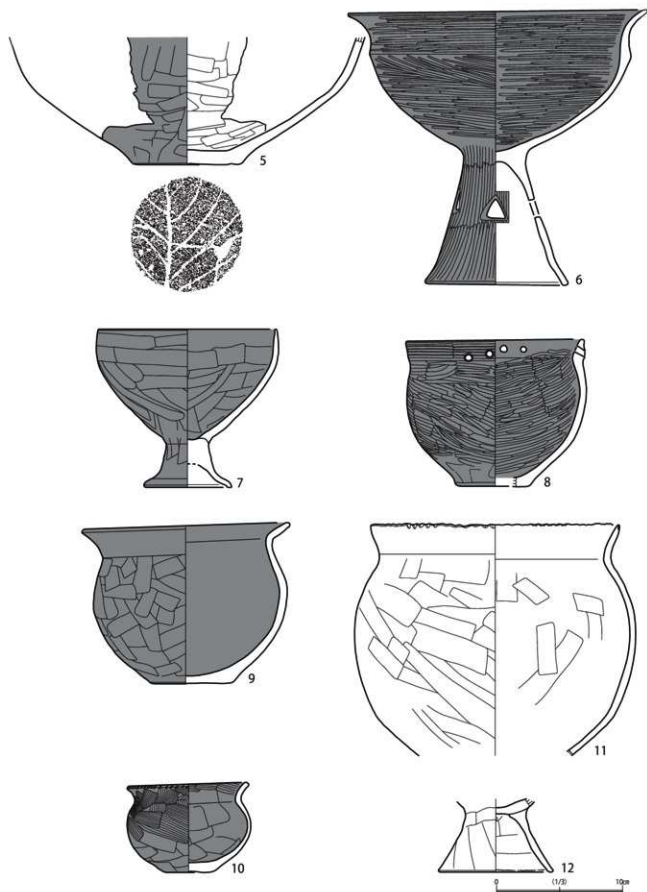
- 1層 灰黄色土 (10YR4/2) 粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ5~20mm) を多く含む。

第8図 第1号周溝状遺構 (SD04)・第5号ピット (P05) 実測図 (2)



第9図 第1号周溝状遺構出土遺物実測図 (1)





第10图 第1号周沟状遗构出土器物实测图(2)

第2表 第1号周溝状遺構出土遺物観察表

探検番号 図数番号	出土遺構	種類 器種	部位	残存率 (%)	法眼 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
9-1							複合口縁・口縁外面横位 RL→LR→RL→LR 横文後 6本1単位の棒状浮文5ヶ所、複合 口縁部下端均等なキザミ・浮文間に凹形朱文 を2個、肩部 LR→RL→RL 横文を2 字状結節文で区画・上部結節上に4個1 単位の凹形浮文を4ヶ所・滑消無文部を足 み2字状結節文で区画・結節文上位に LR→RL→LR→RLの引状横文および 屈曲文を施し断面内部を磨消す・内面横位ミガキ・ 頸部および滑消無文部を赤彩			白色粒子・ シャモット・ 石灰	赤彩→にぶい赤陶 外→灰白 内→灰白	
9-1-1	SD04	弥生土器 甕	口縁部→ 胴部	100	[22.8] [18.8] —	1,400.0						
9-2							口縁部外反・内面横位ケズリ・頸部で接合さ れ接合部内面彫割に筋道痕多数・口縁外面 横位ケズリ・胴部外面横位ランダムなケズリ・ 肩部 LR 横文を2段階し上端を1段の5字状 結節文で区画・下部を2段の5字状結節文で区画・ 横文部に12個の凹形朱文・頸部下位は無文お よび赤彩・口縁部内外面赤彩			白色粒子・ 生土器・ 黒色粒子・ シャモット	赤彩→にぶい赤陶 外→にぶい赤 内→無	
9-1-2	SD04	弥生土器 甕	口縁部→ 底部	60	— [14.9] —	463.0						
9-3							折返し口縁で弱めに広がる・口縁外面 RL→LR 引状横文後 3本1単位の棒状浮文を6ヶ所 残存・内面横位ミガキ・頸部外面横位ミガキ・内面 赤彩・外面頸部下端以下赤彩			白色粒子・ 生土器・ 黒色粒子・ シャモット・ 石灰	赤彩→赤陶 外→灰白 内→にぶい赤	
9-1-3	SD04	弥生土器 甕	口縁部	5	— [5.1] —	78.7						
9-4							—					
9-1-4	SD04	弥生土器 甕	胴部→ 底部	5未満	[2.5] [9.9] —	158.0	内面横位が進む・胴部外面ヘラケズリ			赤色粒子・ 白色粒子・ シャモット	外→にぶい赤 内→灰白	
10-5							—					
9-1-5	SD04	弥生土器 甕	胴部→ 底部	15	[10.1] 8.6	62.5	胴部外面上端横位ケズリ・胴部外面下端横位 ケズリ・胴部外面下端横位ケズリ・内面 横位ケズリ・底部に木炭痕			白色粒子・ シャモット	赤彩→赤陶 外→にぶい赤 内→にぶい赤	
10-6							口縁部大きく外反・環部口縁直下には傾き を持つ・胴上部上位に三角孔が4単位・胴部は ラッパ状に屈やかに広がる・口縁内外面横位 ミガキ・環部内外面横位ミガキ・胴部外面下 半横位ミガキ・環部内外面および胴部外面 赤彩			白色粒子・ 生土器・ シャモット	赤彩→にぶい赤陶 外→灰白 内→灰白	
9-1-6	SD04	弥生土器 高杯	口縁部→ 底部	100	23.6 12.6 11.2	964.0						
10-7							口縁部緩やかに直立する・胴部は短く緩やか に広がる・口縁部内外面横位ケズリ・外面環 部斜位ケズリ・接合部横位ケズリ・胴部外面 横位ナデ・環部内外面および胴部外面赤彩			白色粒子・ 生土器・ 黒色粒子	赤彩→明赤灰 外→にぶい赤 内→にぶい赤	
9-1-7	SD04	弥生土器 高杯	口縁部→ 底部	90	[14.1] [12.6] [6.9]	346.0						
10-8							口縁部外面に横位ハケ目・口縁部に横並びの 2個1対の穿孔が2単位・内側からの境成高 穿孔・内面横位ミガキ・胴部外面斜位ミガキ・ 胴部下端ヘラナデ・内外面赤彩			白色粒子・ シャモット	赤彩→にぶい赤 外→浅黄陶 内→灰白	
9-1-8	SD04	弥生土器 鉢	口縁部→ 底部	80	14.0 [11.6] [5.9]	530.0						
10-9							平底甕・口縁部は大きく外反・口縁部および 頸部内外面横位ナデ・胴部外面ランダムなケ ズリ・内外面赤彩			赤色粒子・ 白色粒子・ シャモット	赤彩→赤陶 外→浅黄陶 内→浅黄陶	
9-1-9	SD04	弥生土器 鉢	口縁部→ 底部	85	16.2 12.5 6.5	692.0						
10-10							口縁部外反する。口縁部外側 RL 隆文・口縁部 外面右上下ハケ目・口縁内面横位ハケ目・胴 部内面横位ミガキ・胴部外面右下リハケ目・ 胴部下位横位ケズリ・内外面赤彩			白色粒子・ 生土器・ シャモット	赤彩→にぶい赤 外→灰白 内→浅黄陶	
9-1-10	SD04	弥生土器 鉢	口縁部→ 底部	100	9.3 7.0 3.8	165.0						
10-11							頸部緩やかな屈曲・胴部球状・口縁部棒状 具押しのキザミ・頸部外面横位ケズリ・肩部 から胴部外面斜位ケズリ			白色粒子・ 生土器・ シャモット	外→にぶい赤 内→にぶい赤	
10-11	SD04	弥生土器 甕	口縁部→ 胴部	25	[10.6] [18.3] —	492.0						
10-12							—					
10-1-12	SD04	弥生土器 台付甕	台部→ 底部	10	[5.8] [9.1] —	85.3	短めの台部で直線的に広がる・接合部外面 横位ケズリ・外面斜位ケズリ・内面横位ケズリ			白色粒子・ シャモット	外→にぶい赤 内→明赤陶	

## 第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物

### 1 溝状遺構

#### 第1号溝状遺構—SD01

遺構 (第11図・図版4-7・8)

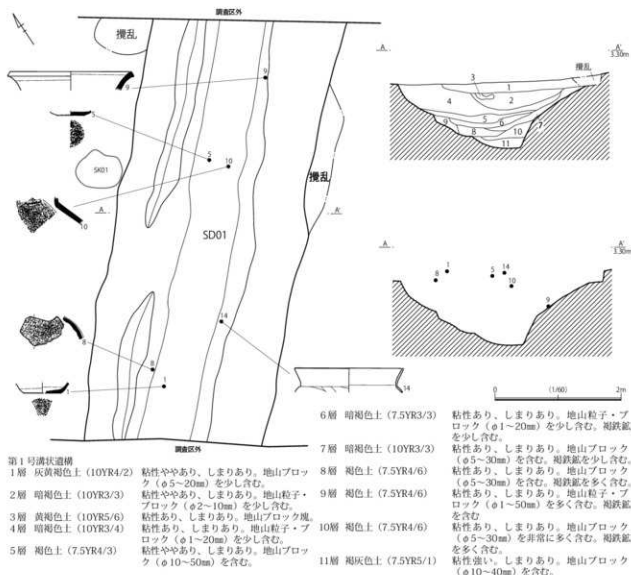
位置：B-2・3、C-1・2・3、D-2グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区壁面南西側から北東へほぼ直線状に伸びる。走行方位N-43°-E。総延長約6.74m、上端幅2.81~3.07m、下端幅0.73~0.87m、確認面からの深さは最大約1.17mである。底面は平坦で、北東方向にわずかに傾斜する。壁面は南東側が底面から直線的に斜めに立ち上がり、北西側は一部にテラスを持ち階段状に立ち上がる。遺構の性格は不明である。

遺物 (第12図・第3表・図版10-2)

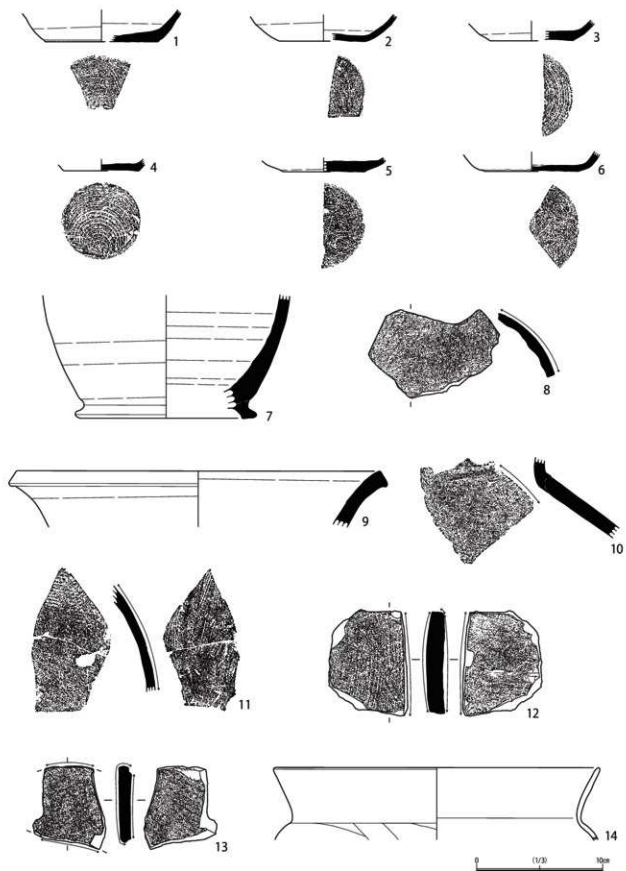
出土状況：覆土の上層を中心に須恵器の坏、甕が出土している。いずれも残存部は少ない。

時期

遺物から、奈良・平安時代の遺構と推定される。



第11図 第1号溝状遺構実測図 (SD01)



第12图 第1号沟状遗物出土物实测图

第3表 第1号溝状遺構出土遺物観察表

探検番号 図数番号	出土 遺構	種類 器種	部位	残存率 (%)	法量 (m) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-1 10-2-1	SD01	須恵器 環	体部へ 底部	15	— [2.5] [9.0]	29.1	ロクロ整形・底部回転系切り後肩辺部横位ヘラケズリ	黒色粒子・ 白色粒子・ 石莖	良	外一灰 内一灰白	
12-2 10-2-2	SD01	須恵器 環	体部へ 底部	10	— [2.1] [6.8]	14.0	ロクロ整形・底部回転ヘラ切り後肩辺部横位ヘラケズリ	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰 内一灰	南北産
12-3 10-2-3	SD01	須恵器 環	体部へ 底部	15	— [1.0] [6.7]	27.9	ロクロ整形・底部回転系切り後肩辺部横位ヘラケズリ	白色粒子・ 黒色粒子	良	外一灰白 内一灰	
12-4 10-2-4	SD01	須恵器 環	底部	15	— [0.9] 5.9	36.8	右ロクロ整形・底部回転系切り	白色粒子・ 黒色粒子・ 石莖・ チャート	良	外一灰 内一灰	
12-5 10-2-5	SD01	須恵器 環	体部へ 底部	15	— [1.1] [6.4]	41.0	ロクロ整形・底部回転系切り後手持ちヘラケズリ	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰オリーブ 内一灰	南北産
12-6 10-2-6	SD01	須恵器 環	体部へ 底部	10	— [1.5] [7.5]	19.5	ロクロ整形・底部回転系切り	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰黄 内一灰黄	南北産
12-7 10-2-7	SD01	須恵器 壺?	胴部へ 底部	5	— [9.7] [14.2]	181.0	ロクロ整形・高台は接合し強い横位ナデ・底面不直・割れ口部が平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子・ 石莖	良	外一灰 内一灰	転用瓶
12-8 10-2-8	SD01	須恵器 壺	胴部	5未満	—	68.3	内面強いロクロ面・外面横位ナデ・外面が平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰灰 内一灰	転用瓶 南北産
12-9 10-2-9	SD01	須恵器 甕	口縁部	5未満	[28.8] [4.4] —	63.8	ロクロ整形・口唇部肥厚・口縁部内外面強い横位ナデ・口唇部から内面に自然釉がかかる	白色粒子・ 黒色粒子	良	外一灰 内一灰白	
12-10 10-2-10	SD01	須恵器 甕	胴部	5未満	—	95.6	胴部外面横位ナデ・外面自然釉がかかる・割れ口部が平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰 内一灰	転用瓶 南北産
12-11 10-2-11	SD01	須恵器 甕	胴部	5未満	—	67.7	内面当て具痕・外面タキ・一部タキが消失する程平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子	良	外一灰白 内一灰	転用瓶
12-12 10-2-12	SD01	須恵器 甕	胴部	5未満	—	88.2	内面縦位ケズリ・外面横位ハケ目・割れ口部および内外面が平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	良	外一灰灰 内一灰	転用瓶 南北産
12-13 10-2-13	SD01	須恵器 甕	胴部	5未満	—	43.1	内面当て具痕・外面タキ・割れ口部および内外面が平滑になっており転用瓶と考えられる	白色粒子・ 黒色粒子・ 石莖	良	外一灰 内一灰白	転用瓶
12-14 10-2-14	SD01	土師器 甕	口縁部	5未満	[25.7] [5.7] —	41.2	ロクロ整形・外面頸部強い横位ナデ・胴部に直下に指道痕を残す	白色粒子・ 黒色粒子・ 角閃石	良	外一明緑 内一赤黄	

## 第2号溝状遺構 - SD02

遺構 (第13図・図版5-1・2)

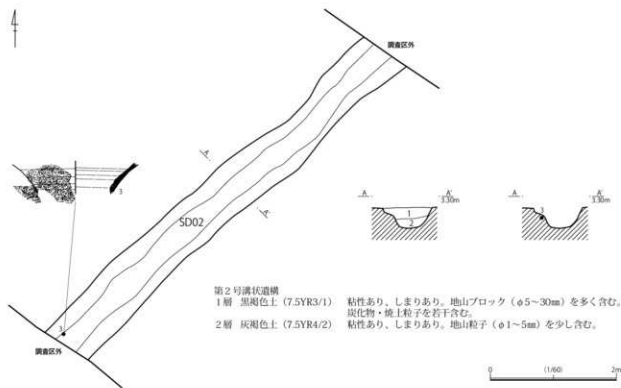
位置：B-3、C-2・3、D-2グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区壁面南西側から北東へほぼ直線状に伸びる。走行方位N-47°-E。総延長約6.88m、上端幅0.58~0.82m、下端幅0.23~0.44m、確認面からの深さは最大約0.34mである。断面形はやや丸みを帯びた底面から内湾しながら立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。

遺物 (第14図・第4表・図版11-1)

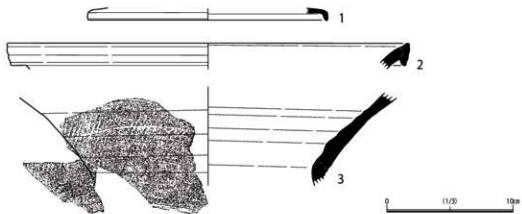
出土状況：覆土中から須恵器の蓋、甕などの破片が出土している。

時期

遺構の規模は異なるが、SD01とほぼ同軸の溝のため、奈良・平安時代の遺構と考えられる。



第13図 第2号溝状遺構実測図 (SD02)



第14図 第2号溝状遺構出土遺物実測図

第4表 第2号溝状遺構出土遺物観察表

探検番号 図版番号	出土 遺構	類別 器種	部位	残存率 (%)	法量 (m) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-1 11-1-1	SD02	須恵器 蓋	口縁部	5未満	[19.0] [0.9] —	3.4	ロクロ整形	白色粘土・ 黒色粘土・ 白色針状物質	良	外一黄灰 内一黄灰	南北企業
14-2 11-1-2	SD02	須恵器 蓋	口縁部	5未満	[31.8] [2.0] —	23.3	ロクロ整形・口縁部を折り返す・内外面横位ナデ	白色粘土・ 黒色粘土・ 白色針状物質	良	外一黄灰 内一黄灰	南北企業
14-3 11-1-3	SD02	須恵器 蓋	胴部	5未満	— [7.8] —	147.0	内面ロクロ痕が見られる・外面斜位タタキ焼横位ナデ	白色粘土・ 黒色粘土・ 白色針状物質・ 石膏	良	外一黄灰 内一黄灰	南北企業

### 第5号溝状遺構－SD05

遺構（第15図・図版5-3）

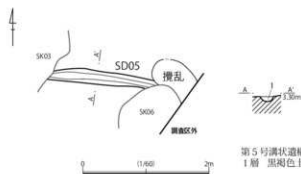
位置：D-5グリッド。重複関係：SK03・06に切られる。平面形・規模：調査区北西で検出され、走行方位N-85°-W。総延長約1.71m、上端幅0.14～0.23m、下端幅0.06～0.12m、確認面からの深さは最大約0.08mである。断面形は丸みを帯びた底面から内湾しながら立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。

遺物

出土状況：覆土中から須恵器の甕などの破片が出土している。

時期

遺物から、平安時代の遺構と推定される。



第5号溝状遺構

1層 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり、しまりあり。褐色土(φ10-30mm)を多量含む。

第15図 第5号溝状遺構実測図(SD05)

## 2 土坑

### 第3号土坑—SK03

遺構（第16図・図版5-4）

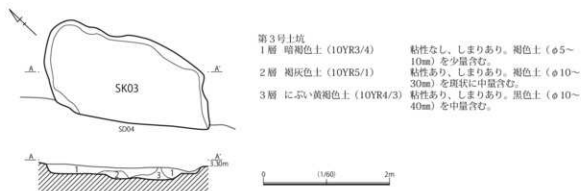
位置：C・D-4・5グリッド。重複関係：SD04を切る。平面形・規模：調査区北東で検出され、主軸方向N-11°-W。長軸2.93m、短軸1.67m、検出面より深さ0.25mで、平面形は不整形円形を呈する。

遺物（第17図・第5表・図版11-2）

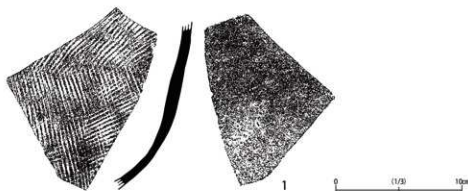
出土状況：覆土中から須恵器の甕などの破片が出土している。

時期

覆土と遺物から、奈良・平安時代の遺構と推定される。



第16図 第3号土坑実測図 (SK03)



第17図 第3号土坑出土遺物実測図

第5表 第3号土坑出土遺物観察表

神代番号	出土遺構	種類	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
17-1	SK03	須恵器	胴部	5未満	—	145.0	内面横位ナデ・当て具痕を残す・内面下位自然輪がかかる・外面斜位の交差するタタキ・タタキが一部平滑になっており転用砥と考えられる	白色粒子・黒色粒子	良	外一脱灰 内—ぶい・黄褐色	転用砥
11-2-1											



## 第4号土坑—SK04

遺構（第18図・図版5-5）

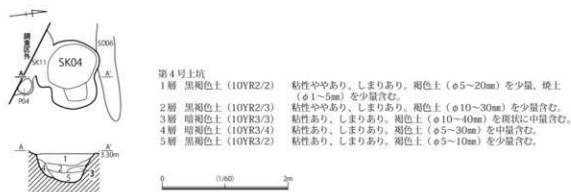
位置：D・E-3・4グリッド。重複関係：SK11を切り、SD06に切られる。平面形・規模：調査区南で検出され、主軸方向N-87°-W。長軸1.09m、短軸0.87m、検出面より深さ0.45mで、平面形は不整形円形を呈する。平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。また、南側にテラス状の掘り込みを持つ。覆土上層に焼土粒が認められる。

遺物（第19図・第6表・図版11-3）

出土状況：覆土中から須恵器の坏、甕などの破片が出土している。

時期

覆土と遺物から、奈良・平安時代の遺構と推定される。



第18図 第4号土坑実測図(SK04)



第19図 第4号土坑出土遺物実測図

第6表 第4号土坑出土遺物観察表

探検番号 — 採取番号	出土 遺構	種別 器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19-1 11-3-1	SK04	須恵器 坏	体部へ 底部	5	— [2.3] [6.3]	20.0	ロクロ整形・底部回転糸切り・肩辺部回転ヘラケズリ	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質	真	外一灰黄 内一灰白	南北企業
19-2 11-3-2	SK04	須恵器 坏	体部へ 底部	5	— [2.0] [5.9]	17.1	ロクロ整形・底部回転ヘラケズリ	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質・ チャート	真	外一灰 内一灰白	南北企業

## 第5号土坑—SK05

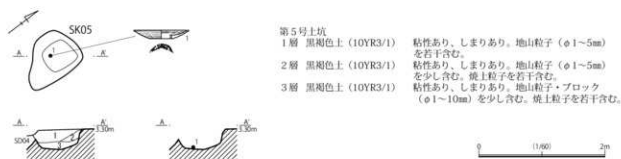
遺構（第20図・図版5-6）

位置：D-5グリッド。重複関係：SD04を切る。平面形・規模：調査区北東で検出され、主軸方向N-5°-W。長軸0.98m、短軸0.72m、検出面より深さ0.33mで、平面形は不整楕円形を呈する。遺物（第21図・第7表・図版11-4）

出土状況：覆土中から土師器の皿・環、須恵器の環などの破片が出土している。

時期

遺物から、奈良・平安時代の遺構と推定される。3の比企型環は流れ込みであろう。



第20図 第5号土坑実測図 (SK05)



第21図 第5号土坑出土遺物実測図

第7表 第5号土坑出土遺物観察表

探検番号	出土遺構	種別・器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 口径高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21-1 11-4-1	SK05	土師器 皿	口縁部～ 底部	40	[13.0] [2.0] [5.6]	49.3	ロクロ整形・内外面横位ナデ・底部ヘラ切磨し	白色粒子・ 黑色粒子・ 内閉石	真	外一層 内一黄橙	
21-2 11-4-2	SK05	須恵器 環	口縁部～ 体部	10	[13.8] [2.9] —	22.0	内外面ロクロ整形が強く残る	白色粒子・ 黑色粒子・ 白色針状物質	真	外一黄灰 内一黄灰	南北企産
21-3 11-4-3	SK05	土師器 環	口縁部～ 体部	5未満	[11.9] [2.5] —	6.8	内外面横位ナデ・内部口縁部に沿った凹み・ 内面及び口縁部外面赤彩	白色粒子・ 黑色粒子	真	赤彩・赤 外一にぶい 内一にぶい	

## 第6号土坑—SK06

遺構（第22図・図版5-7）

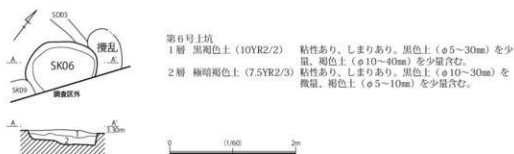
位置：D-5グリッド。重複関係：SD05、SK09を切る。平面形・規模：調査区北東で検出され、主軸方向N-36°-E。長軸1.16m、短軸0.74m以上、検出面より深さ0.24mで、平面形は不整楕円形を呈する。

遺物（第23図・第8表・図版11-5）

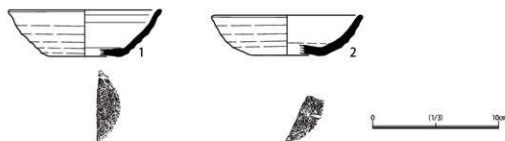
出土状況：覆土中から須恵器の坏などが出土している。

時期

遺物から、平安時代の遺構と推定される。



第22図 第6号土坑実測図 (SK06)



第23図 第6号土坑出土遺物実測図

第8表 第6号土坑出土遺物観察表

探検番号	出土遺構	種類器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-1	SK06	須恵器 坏	口縁部~ 底部	25	[12.0] [3.7] [5.8]	46.7	内外面ロケロ痕が強く残る・底部回転系切り	白色粒子・ 黒色粒子・ 白色針状物質・ 石英	真	外一黄灰 内一黄灰	南北企業
11-5-1											
23-2	SK06	須恵器 坏	口縁部~ 底部	15	[11.8] [3.2] [5.6]	33.2	ロケロ整形・底部回転系切り	白色粒子・ 白色針状物質・ 礫・石英	真	外一灰 内一黄灰	南北企業
11-5-2											

## 第9号土坑—SK09

遺構（第24図・図版5-8）

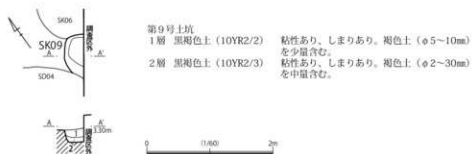
位置：D-5グリッド。重複関係：SD04を切り、SK06に切られる。平面形・規模：調査区北東で検出され、主軸方向N-36°-E。長軸0.71m、短軸0.30m以上、検出面より深さ0.23mで、一部が調査区外へ伸びる。平面形は不整楕円形と思われる。

遺物

出土状況：覆土中から須恵器の坏、甕などの破片が出土している。

時期

遺物から、奈良・平安時代の遺構と推定される。



第24図 第9号土坑実測図 (SK09)

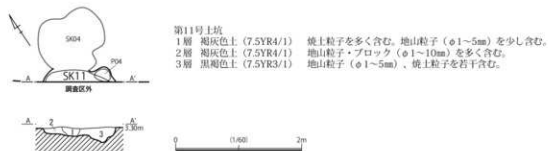
## 第11号土坑—SK11

遺構（第25図・図版6-1）

位置：E-3・4グリッド。重複関係：SK04、P04に切られる。平面形・規模：調査区南東で検出され、主軸方向N-56°-W。長軸1.15m以上、短軸0.21m以上、検出面より深さ0.24mで、一部が調査区外へ伸びる。平面形は不整楕円形と思われる。

時期

覆土、切り合い関係から、奈良・平安時代の遺構と推定される。



第25図 第11号土坑実測図 (SK11)

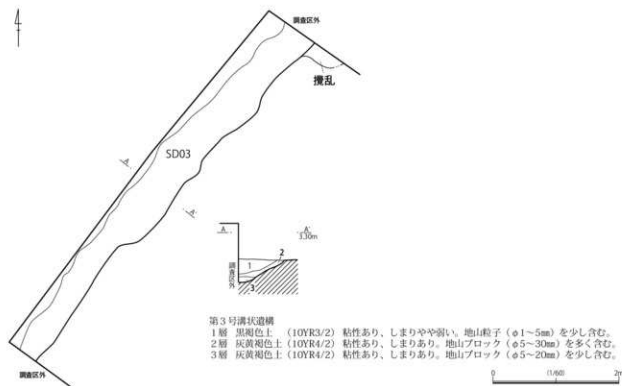
## 第3節 時期不明の遺構と遺物

### 1 溝状遺構

#### 第3号溝状遺構 - SD03

遺構 (第26図・図版6-2・3)

位置: A-2、B-1・2、C-1グリッド。重複関係: なし。平面形・規模: 調査区壁面北西側で検出され、走行方位N-40°-E。総延長約6.71m、上端幅0.87~0.51m以上、下端幅0.36~0.01m以上、確認面からの深さは最大約0.37m。断面形は平面的な底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面の傾斜方向は不明である。



第26図 第3号溝状遺構実測図 (SD03)

#### 第6号溝状遺構 - SD06

遺構 (第27図・図版6-4)

位置: D-3・4グリッド。重複関係: SD04・07・08・09を切り、SK08に切られる。平面形・規模: 調査区壁面南西側で検出され、走行方位N-77°-W。総延長約3.88m、上端幅0.21~0.32m、下端幅0.07~0.16m、確認面からの深さは最大約0.14mである。断面形はやや丸みを帯びた底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面は西方向へ緩やかに傾斜する。

#### 第7号溝状遺構 - SD07

遺構 (第27図)

位置: D-3グリッド。重複関係: SD04を切り、SD06に切られる。平面形・規模: 調査区壁面南西側で検出され、走行方位N-30°-E。総延長約1.80m、上端幅0.33~0.36m、下端幅0.24

～0.29m、確認面からの深さは最大約0.10mである。断面形はやや丸みを帯びた底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。

### 第8号溝状遺構－SD08

遺構（第27図・図版6-5）

位置：D・E-3グリッド。重複関係：SD06・SK08に切られる。平面形・規模：調査区壁面南西側で検出され、走行方位N-23°-E。総延長約0.70m、上端幅0.36～0.41m、下端幅0.22～0.27m、確認面からの深さは最大約0.1mである。断面形は平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。

### 第9号溝状遺構－SD09

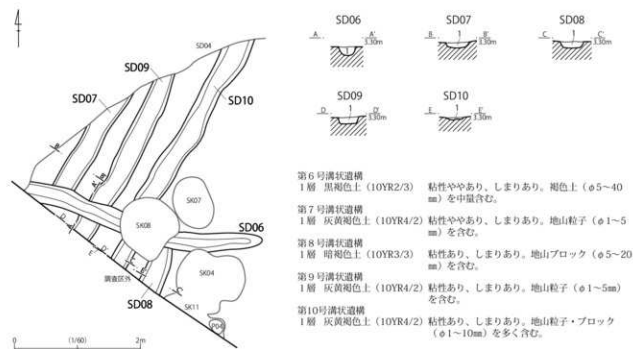
遺構（第27図・図版6-6）

位置：D-3グリッド。重複関係：SD04を切り、SD06に切られる。平面形・規模：調査区中央西側で検出され、走行方位N-27°-E。総延長約2.96m、上端幅0.32～0.37m、下端幅0.21～0.28m、確認面からの深さは最大約0.11mである。断面形は平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。

### 第10号溝状遺構－SD10

遺構（第27図・図版6-7）

位置：D-3・4グリッド。重複関係：SD04を切り、SK08に切られる。平面形・規模：調査区中央西側で検出され、走行方位N-28°-E。総延長約4.15m、上端幅0.29～0.44m、下端幅0.15～0.28m、確認面からの深さは最大約0.04mである。断面形は平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。底面の目立った傾斜は見られない。



第27図 第6・7・8・9・10号溝状遺構実測図 (SD06・07・08・09・10)

## 2 土 坑

### 第1号土坑—SK01

遺構 (第28図・図版6-8・図版7-1)

位置：B-2グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区北西側で検出され、主軸方向N-57°-W。長軸0.74m、短軸0.61m、検出面より深さ0.08mで、平面形は不整楕円形を呈する。

### 第2号土坑—SK02

遺構 (第28図・図版7-2・3)

位置：C-D-3グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区中央で検出され、主軸方向N-40°-W。長軸0.69m、短軸0.66m、検出面より深さ0.21mで、平面形は不整円形を呈する。

### 第7号土坑—SK07

遺構 (第28図・図版7-4・5)

位置：D-3・4グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区中央南東側で検出され、主軸方向N-20°-W。長軸0.84m、短軸0.60m、検出面より深さ0.13mで、平面形は不整楕円形を呈する。

### 第8号土坑—SK08

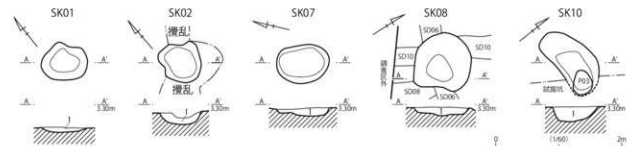
遺構 (第28図・図版7-6・7)

位置：D-3グリッド。重複関係：SD06・08・10を切る。平面形・規模：調査区中央南東側で検出され、主軸方向N-3°-E。長軸1.00m、短軸0.94m、検出面より深さ0.13mで、平面形は不整円形を呈する。

### 第10号土坑—SK10

遺構 (第28図・図版7-8)

位置：D-4グリッド。重複関係：P03に切られる。平面形・規模：調査区中央東側で検出され、主軸方向N-85°-E。長軸1.06m以上、短軸0.57m、検出面より深さ0.24mで、平面形は不整楕円形を呈する。



第1号土坑  
1層 黒褐色土 (10YR2/2)

粘性あり、しまりあり。褐色土 (φ5~20mm) を少量、黒色土 (φ5~30mm) を少量含む。

第2号土坑  
1層 褐灰色土 (5YR4/1)

粘性あり、しまりあり。地山砂子・ブロック (φ1~10mm) を少し含む。炭化物粒子を若干含む。

第7号土坑  
1層 暗褐色土 (10YR3/3)

粘性ややあり、しまりあり。褐色土 (φ5~20mm) を少量、黒色土 (φ5~10mm) 少量含む。

第8号土坑  
1層 褐灰色土 (7.5YR5/1)

粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ5~30mm) を含む。

第10号土坑  
1層 褐灰色土 (7.5YR4/1)

粘性あり、しまりあり。地山ブロック (φ5~50mm) を多く含む。

第28図 第1・2・7・8・10号土坑実測図 (SK01・02・07・08・10)

### 3 ビット

#### 第1号ビットー P01

遺構 (第29図・図版8-1・2)

位置：D-4グリッド。重複関係：SD04を切る。平面形・規模：調査区中央東側で検出され、主軸方向N-25°-E。長軸0.45m、短軸0.44m、検出面より深さ0.14mで、平面形は不整形円形を呈する。

#### 第2号ビットー P02

遺構 (第29図・図版8-3・4)

位置：D-4グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区東側で検出され、主軸方向N-71°-E。長軸0.28m、短軸0.21m、検出面より深さ0.15mで、平面形は不整形円形を呈する。

#### 第3号ビットー P03

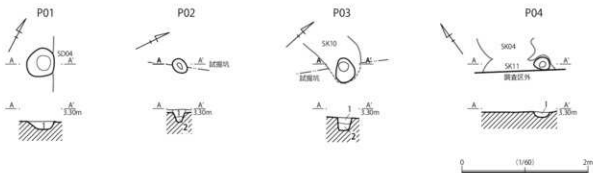
遺構 (第29図・図版8-5・6)

位置：D-4グリッド。重複関係：SK10を切る。平面形・規模：調査区中央東側で検出され、主軸方向N-47°-W。長軸0.38m、短軸0.31m、検出面より深さ0.22mで、平面形は不整形円形を呈する。

#### 第4号ビットー P04

遺構 (第29図・図版8-7・8)

位置：E-4グリッド。重複関係：SK11を切る。平面形・規模：調査区南東側で検出され、主軸方向N-47°-W。長軸0.25m、短軸0.20m、検出面より深さ0.09mで、平面形は不整形円形を呈する。



#### 第1号ビット

1層 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、しまりあり。ローム (φ20~40mm) を多量に含む。

#### 第2号ビット

1層 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、しまりあり。褐色土 (φ10~30mm) を多量含む。  
2層 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり、しまりあり。黒色土 (φ5~20mm) を少量含む。

#### 第3号ビット

1層 黒褐色土 (10YR2/3)  
2層 褐色土 (10YR4/4)

粘性ややあり、しまりあり。褐色土 (φ5~20mm) を少量含む。  
粘性あり、しまりあり。褐色土 (φ10~30mm) を中量、黒色土 (φ5~20mm) を少量含む。

#### 第4号ビット

1層 黒褐色土 (7.5YR3/2)

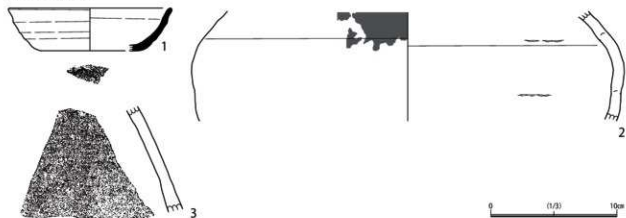
粘性あり、しまりあり。地山粒子 (φ1~5mm) を少し含む。焼土粒子を少し含む。

第29図 第1・2・3・4号ビット実測図 (P01・02・03・04)



#### 4 遺構外出土遺物（第30図・第9表・図版11-6）

出土状況：ここでは他時期の遺構及び試掘時出土の遺物を示す。1は須恵器の坏、2・3は常滑窯産の甕である。



第30図 遺構外出土遺物実測図

第9表 遺構外出土遺物観察表

探検番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	残存率 (%)	法量 (m) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
30-1 11-6-1	1トシ	須恵器 坏	口縁部～ 底部	5	[12.8] [3.4] [7.6]	16.0	ロクロ整形・底部静止系切り	白色粒子・ 白色針状物質・ 石英	良	外-黄灰 内-灰	南北企業
30-2 11-6-2	SD01	陶器 甕	胴部破片	5未満	— [8.7] —	80.2	内面横位ナデ・外面自然釉がかかる	白色粒子・ 黒色粒子・ 砂粒	良	外-灰黄 内-灰褐	常滑
30-3 11-6-3	SD01	陶器 甕	胴部	5未満	—	112.3	内面当て具痕を残り、横位ナデ・外面横位ナデ	白色粒子・ 黒色粒子・ 砂粒	良	外-にふい赤褐 内-灰黄褐	常滑

## 第4章 まとめ

今回の前谷遺跡第9次調査では、弥生時代後期の周溝状遺構1基、ピット1基、奈良・平安時代の溝状遺構3条、土坑6基、時期不明の溝状遺構6条、土坑5基、ピット4基を検出した。以下各時代の様相について述べる。

### 1 弥生時代後期

本次の調査では、周溝状遺構1基とピット1基である。周溝状遺構は、調査区東側で確認した。コーナー部分を起点に北西溝が6.2mで南東溝が6.3mとなり、それぞれ調査区外に伸びている。調査地南東側の第8次調査において、南東に伸びる溝は確認できないことから、南東調査区外に伸びた後すぐに途切れるか北西側に屈曲しているものと考えられ、一辺が7mから8mほどの規模と推定できる。

現在周溝状遺構の性格については、方形周溝墓以外に周溝をもつ建物跡の可能性が指摘されており、周溝内に柱穴が見られる場合や、溝幅が狭い場合などは周溝を持つ建物跡の可能性が高くなっている。前谷遺跡では、現在までに周溝状遺構が21基確認され、第8次調査の性格不明遺構1基、第10次調査の周溝状遺構の可能性のある溝状遺構8条を加えると30基となる。確認されている周溝状遺構のうち、第3次調査の周溝状遺構は周溝内に柱穴が確認できることや、切り合いが多いことから周溝持ち建物と指摘され、またほぼ完全に検出された第1次調査の1号方形周溝墓も福田聖氏が検討を加え、一辺の中央が切れることと、規模の点から周溝持ち建物と指摘している。

このように前谷遺跡においては、周溝状遺構が多く検出されているが用途が分かるものは少なく、また方形周溝墓と明確に指摘されているものはない状況である。今回検出した周溝状遺構は、二辺のみの検出であるが、略完形の土器が多いことが他の周溝状遺構と明確に異なる。完形の土器は壺・高坏を中心とし下層・中層から出土している。層位が異なる地点で完形土器が多数出土した事例は、鍛冶谷・新田口遺跡第10次調査の第2号周溝状遺構が該当する。報告書では方形周溝墓への祭祀が継続的に行われたものと指摘しており、今回の調査事例においても同様のものと見られ、また重複する遺構がない状況からも方形周溝墓の可能性が高い。

完形の遺物のうち、第1号周溝状遺構・遺物番号6の高坏は、坏部に稜を持ち、口縁が外反気味に湾曲する点など比田井分類のF類にあたり、三角形の透穴などからも中部高地の箱清水式に類似する土器と見られる。市内では他に類例がないため、市外の遺跡との比較・検討が必要であろう。

### 2 奈良・平安時代

奈良・平安時代では溝状遺構3条、土坑6基を検出した。第1号溝状遺構・第2号溝状遺構は、調査地西側で検出された。第1号溝状遺構は、上端幅約3mの大溝で、下層は水の影響かグライ化している。前谷遺跡では類例はないが、蕨市にある蕨城は元々前谷遺跡近接の元蕨周辺に位置していたという指摘がある。須臾器が多く出土しているが、上層一部は近世耕作土層と近似しているため、中世に下る可能性もあり、調査の進展が望まれる。

第2号溝状遺構は、幅約0.5mほどの浅い溝で、第1号溝状遺構と軸がほぼ同じである。前谷遺跡内には同規模の溝が多く検出され、いずれも平安時代から中世までの時期と指摘されている。屋敷等の区画溝の役割を持っていたとみられる。

第5号溝状遺構は、調査地東側で確認した幅0.2mほどの小規模な溝である。近隣の事例では、調査地北側の第7次調査で小規模の溝が等間隔で検出され、平安時代の畝跡と指摘されている。時期不明の第6号溝状遺構から第10号溝状遺構も同様に幅が狭く浅い溝で、特に第7号溝状遺構から第10号溝状遺構までは等間隔に並んでおり、同時期の畑が調査地まで及んでいた可能性がある。

### 3 結語

今回の調査では、弥生時代後期から平安時代までの遺構・遺物を多く検出することができた。特に周溝状遺構は方形周溝墓の可能性が高い遺構で、性格不明のものが多く前谷遺跡の中で貴重な成果である。前谷遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、重複して検出されるものが多く、建物の建て替え等を頻繁に行っていたと見られるが、北西側は遺構が少ない傾向にあり、現状のところ第8次調査の性格不明遺構1基と本調査の周溝状遺構・ピットのみとなっている。このことは、同時期の集落は前谷遺跡北西部を墓域とし、その周辺を生活の場とする集落形態であった可能性が指摘できる。

今後も継続的な調査を行うなかで前谷遺跡の集落形態、また周溝状遺構と竪穴建物の時期差、性格について明らかにしていきたい。

### 参考文献

- 比田井克仁「土器祭祀の新展開」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版 2001  
福田聖『方形周溝墓の再発見』同成社 2000  
福田聖『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房 2014

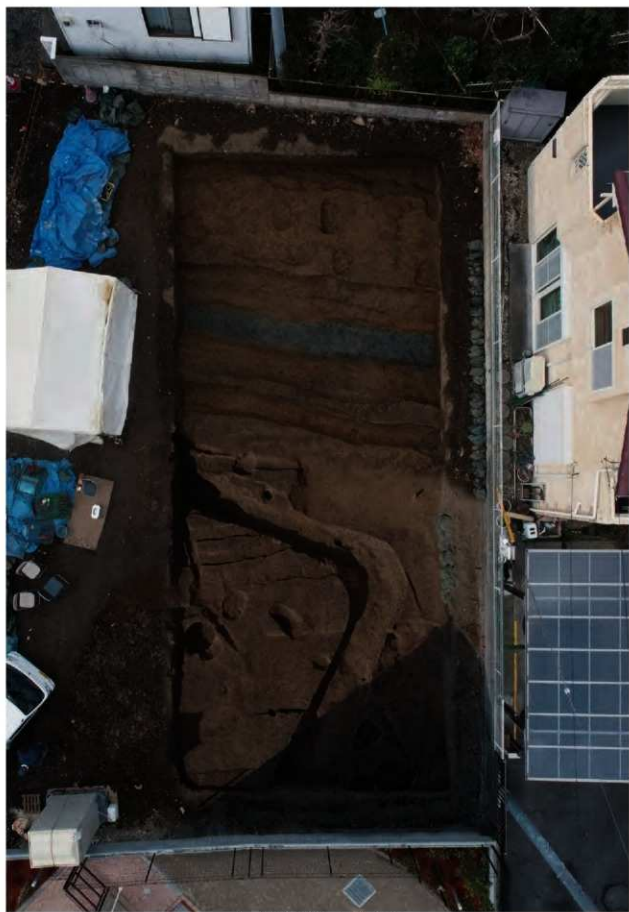
### 報告書

- 赤熊浩一『前谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第394集 2012  
今井源吾・辻弘和『前谷遺跡Ⅵ』戸田市文化財調査報告XXIX 2020  
今井源吾・諸星良一『前谷遺跡Ⅶ』戸田市文化財調査報告XXX 2020  
岩井聖吾『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅹ』戸田市文化財調査報告XXIV 2016



# 写 真 图 版





1 調査区全体（上空から）



1 第1号周溝状遺構遺物出土状況（東から）



2 第1号周溝状遺構遺物出土状況（北から） - 1





1 第1号周溝状遺構遺物出土状況(北から) - 2



2 A区完掘状況(西から) - 1



3 A区完掘状況(西から) - 2



4 B区完掘状況(西から)



5 B区完掘状況(北から)



1 B区基本層序（北から）



2 B区壁断面（北から）



3 第1号周溝状遺構壁断面（北から）



4 第1号周溝状遺構B断面（北から）



5 第1号周溝状遺構C断面（南から）



6 第5号ビット完掘状況（南から）



7 第1号溝状遺構完掘状況（西から）



8 第1号溝状遺構断面（東から）



1 第2号溝状遺構完掘状況(西から)



2 第2号溝状遺構断面(東から)



3 第5号溝状遺構断面(北から)



4 第3号土坑断面(西から)



5 第4号土坑完掘状況(南から)



6 第5号土坑完掘状況(東から)



7 第6号土坑断面(北から)



8 第9号土坑完掘状況(東から)



1 第11号土坑完掘状況（東から）



2 第3号溝状遺構完掘状況（西から）



3 第3号溝状遺構断面（東から）



4 第6号溝状遺構断面（南から）



5 第8号溝状遺構断面（東から）



6 第9号溝状遺構断面（東から）



7 第10号溝状遺構完掘（北から）



8 第1号土坑完掘状況（東から）





1 第1号土坑断面（東から）



2 第2号土坑完掘状況（西から）



3 第2号土坑断面（東から）



4 第7号土坑完掘状況（東から）



5 第7号土坑断面（東から）



6 第8号土坑完掘状況（東から）



7 第8号土坑断面（北から）



8 第10号土坑完掘状況（北から）



1 第1号ピット完掘状況（北から）



2 第1号ピット断面（北から）



3 第2号ピット完掘状況（北から）



4 第2号ピット断面（北から）



5 第3号ピット完掘状況（西から）



6 第3号ピット断面（南から）



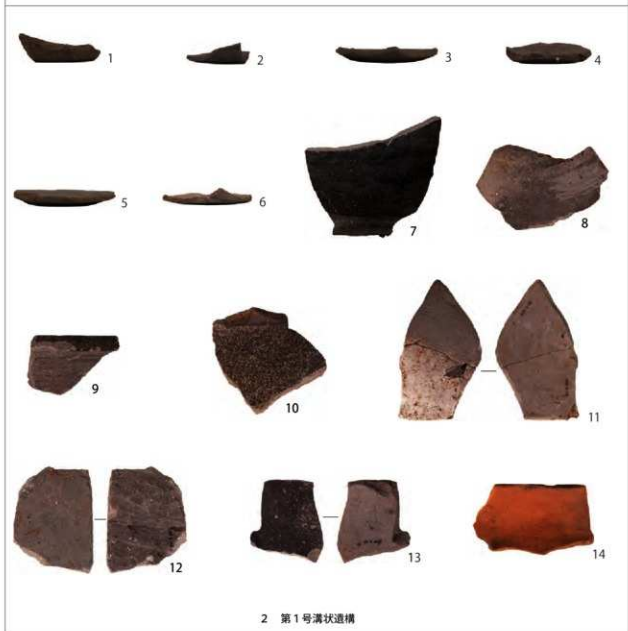
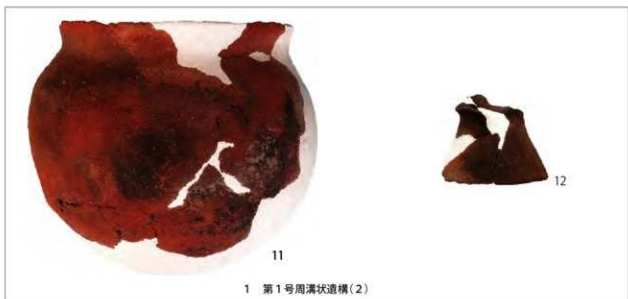
7 第4号ピット完掘状況（東から）



8 第4号ピット断面（東から）



1 第1号周溝状遺構(1)  
出土遺物(1)







出土遺物 (3)

# 報告書抄録

ふりがな	まえやいせききゅう							
書名	前谷遺跡区							
副書名								
シリーズ名	戸田市文化財調査報告							
シリーズ番号	32							
編著者名	今井源吾・内田健太							
編集機関	戸田市教育委員会							
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 Tel.048(44)1800							
発行年月日	西暦2021(令和3)年8月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
前谷遺跡 第9次調査	戸田市上戸田 2丁目27番6	11224	06-003、004、005	35°48'51"	139°40'47"	2021.1.13 ～ 2021.2.12	111.79	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前谷遺跡	集落跡	弥生時代	周溝状遺構 ピット	1基 1基 弥生土器	周溝状遺構は方形周溝墓の可能性はある。
		奈良・平安	溝状遺構 土坑	3条 6基 須恵器 土師器	
		時期不明	溝状遺構 土坑 ピット	6条 5基 4基 須恵器 土師器 陶器	

要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である前谷遺跡の範囲に属し、JR 埼京線戸田公園駅から北東に約 700 m の戸田市上戸田 2 丁目 27 番 6 に所在する。</p> <p>前谷遺跡は、利根川・荒川・入間川によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）の左岸に分布している微高地に立地している。</p> <p>調査の結果、弥生時代後期後半の方形周溝墓と思われる周溝状遺構 1 基、ピット 1 基を検出した。奈良時代から平安時代では、溝状遺構 3 条、土坑 6 基を検出した。時期不明の遺構としては、溝状遺構 6 条、土坑 5 基、ピット 4 基を検出した。遺物は弥生時代後期後半の土器、奈良時代・平安時代の須恵器・土師器が出土した。</p> <p>今回の調査によって、弥生時代後期から古墳時代前期における前谷遺跡の集落は、北西部を墓域とし、その周辺を生活の場とする集落形態であった可能性があることが判明した。</p>
----	--

## 前谷遺跡Ⅸ

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会  
〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1  
℡ 048(441)1800

印刷 朝日印刷工業株式会社  
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67  
℡ 027(251)1212

発行日 令和3年8月31日